
ネットの向こうのキミへ

千紗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ネットの向こうのキミへ

【Nコード】

N7693Z

【作者名】

千紗

【あらすじ】

中1の千紗はネットの向こうにいるクラスメイト陵うらに恋をする。

男女と地味男が隠し持つ裏の性格にお互いが惹かれあう。

そんな2人の青春純愛ラブストーリー

ブローグ

くブローグく

学校でのキミとネットの向こうのキミは違う。

いや、違わないかもしれない。

いや、やっぱり何処か違うんだ。

・・・こんなあたしの想像かも知れないけど。

学校では男女のあたしでもネットでは可愛い女の子になれる。

キミだって、ネットじゃあ、あんなに明るいじゃん。

画面の向こうのキミだけど、見たことないキミの素顔だけど

あたしはネットの向こうのキミが好きです。

これを世の中ではダメな人間としてみなされる行為であったとしても、

クラスメイトがネットでの公然ラブラブだとかでからかってきても

あたしは彼方が好きです。

くネットの向こうのキミへく

第1話

「テメエ、ふざけんじゃねー！ー！ー！ー！ー！」

ドンガラガツシャーン！！

机と椅子が教室に散らばり、一人男子が仰向けにぶっ倒れている。
この情景は日常茶飯事。

あたしはまだまだ長いスカート丈が慣れない中学生だ。

男勝りのこの性格に、兄ちゃんから受け継いだ言葉遣いの悪さ。

ミス何チャラでグランプリのお母さんの血を受け継いでるおかげで
顔は悪くない…はずだ。

勉強も全国トップレベルだし、男子にモテないおかげで女子から好
かれる始末。

あたしこと千紗は何不自由のない、どこにでもある生活をしていた。

「ちょっと！千紗！女子なのに怪我したらどうするの！」

そういつて駆けつけてきたのはバスケ部の愛莉だ。

愛莉はボブカットで男子からモテるが、女子からは好かれない典型
的な声高ぶりっ子。

まあ、こんなヤツでもあたしの幼馴染という肩書のおかげで表面上
は上手いことやってる。

「いつも見てんだから分かるだろーが。こんなひ弱なやつに負ける

ほどあたしは弱くない。」

「…よくもやりやがったなあ…。」

フラフラと立ち上がったのはあたしと愛莉の幼馴染の翔。

クソほど背が小さくて、メガネなんだけど、素顔はマジで可愛い。

いや、マジでもう男子とは思えないほど可愛い。

二重で顔が小さくて、まつ毛がヤバいほど長くて！

…超うらやましい限りなんだけど。

「おい千紗！テメエよくも殴りやがったな！」

「うるせえ！最初にケンカ売ってきたのはそっちだろーが！」

翔が殴りかかろうとしたところに飛び出してきた飛び蹴りを喰らわしたのは和泉だ。

「よお！大丈夫？」

和泉はあたしと同じ美術部員で、しかも男勝りな性格をしている。勿論、ケンカも男子よりは絶対に強い。

「さっすが和泉！飛び蹴り上手じゃん。」

「まあ、千紗には負けるけどな。」

2人で肩を組み合っているところにやってきたのは、バスケ部の桃。

「あんたら、どーゆー会話してんのよ。」

桃はショートカットでサバサバした性格で結構男子からモテる。

愛莉と桃は昔からちよつとばかり性格が合わなくて、何度喧嘩になつたことか…。

「くっ…。またコイツ等に負けた…。」

「ヘッ！あたしにケンカで勝とうなんて100万年早いんだよ！」

「うつぜええええっ！！！」

翔とあたしはいつものように睨み合いながら口喧嘩をする。

今は6月。

中学生になって新しくなったクラスにもようやく馴染んできたころだつた。

ガラガラ……。

「コラー！さつさと席に付けー！」

先生がドカドカと足音を立てながら教室に入ってきた。

あたしは右から4番目、前から5番目の自分の席に腰を下ろす。

「ねえねえ千紗！朝自習のプリント、予備ある？」

あたしの後ろの席の和泉が話しかけて来ると同時に次は雄大が話しかけてきた。

「なあ、千紗。朝自習のプリント、予備ある？」

雄大はあたしの隣の席のヤツでビン底メガネの秀才。

ところがメガネをはずすと、メチャメチャカツコイイイケメンで、

どこかの少女漫画か！って感じなんだけど。

「プリントって…これか？」

そっついながら一枚のプリントを差し出してきたのは雄大の後ろ、つまり和泉の隣の陵だった。

陵は普段からおとなしくて…とゆーより、影薄い存在。

頭もいいわけでもなく、悪いわけでもなく、運動もどっちかっていうと悪いぐらい。

顔は悪くないと思うけど…まあ、好き嫌いのありそうな顔だ。

「おお！ナイス陵！」

「あ、ああ…」

あたしはいつものように少し乱暴にプリントを取り上げると、雄大に渡した。

あたしの予備のプリントは和泉にあげて、ようやく準備完了！

そのプリントには『クラスメイトの趣味を知ろう！』と書かれていた。

「…何だよ、コレ。小学生かよお！」

あたしはやる気なさそうに椅子にもたれかかると雄大は言った。

「まあ、そんなこと言わずにさ、やろうぜ。」

「お前だって、いつ最近まではランドセルだったんだから。」

雄大に続いて和泉があたしを宥めるように言う。

「まったく、さつさと終わらせようぜ！」

あたしは椅子の向きを変えて、丁度陵の方向を向いた。

「なあ、陵！お前の趣味って何だ？」

「え、あ、俺はその…」

「何だよ！さつさと言えって！」

「…パソコンと音楽鑑賞。」

「へえ、何聴くんか？あたしは基本Ｊ・ＰＯＰだけど。」

「え…っと…日本ロック…」

あたしは意外な趣味に驚いて考えるより先に口走ってしまった。

「えええええ！？ロック好きなの！？あんな喚いてばっかのヤツのどこが！？」

すると、陵の逆鱗に触れたのか、陵はいきなり立ち上がり、

「はあ！？お前はロックの良さを何もわかってねえんだよ！」

「はああ！？Ｊ・ＰＯＰの方が歌詞も良いしリズムもいいし！！！」

「ロックのほうが歌詞はいいに決まってるだろ！？」

あたしにとってこれはいつもの日常…

だけど、周りはそうは思っていないかった。

「りよ、陵が…」

「女子としゃべった…？」

「…？どーしたんだよ、みんな。何見てんの。」
「え…だって…陵が女子としゃべったから…」

あたしは陵の横顔をみると、陵はうつむいたままで顔を赤らめていた。

あたしにとつて、男子はただの友達で喧嘩仲間。

その男子が顔を赤らめて恥ずかしがるなんて不思議でしかなかった。

その時からあたしは陵を少し不思議に感じていたのかもしれない。

「…んだよ、陵。気にすんなってえ！！」

あたしが肩をパンつと叩くと陵は少しだけ恥ずかしがりながら言い放った。

「いってえんだよ！バーカ！」

「おっ？喧嘩売ってんのか？殺るぞ、おい！」

「殺れるもんなら殺ってみろ！」

「へえ…言っただけだ！」

そう言つて、殴りかかろうとしたときだった。

ヒョロヒョロでほっそりとした腕が伸びて、あたしの拳を受け止めた。

「…え？」

「…お前も女子なんだから、喧嘩はほどほどにしろ。」

「やだね。」

「俺に勝てないようじゃ、喧嘩の女王もそろそろ落ちるな。」

「…なんだとおっ！？」

「おいおい！2人とも落ち着けて！」
「ほら！先生見てるし！！」

雄大と和泉が慌ただしく、あたしたちの止めに入る。

あたしと和泉は小学校からの心友。

雄大と陵も小学校からの心友だった。

この4人が出会ったのは、この中学校の青春時代。

あたしたちのこれからずっと続くストーリーはここから始まっていたんだ。

く 続 く

第2話

「ただいまあゝ」

家のドアを開けると、ゲームをしている音が聞こえてきた。

あたしはその音のする部屋に向かうと、次はクッキーの匂いがした。

「ちょっと楓^{ふう}！あんたゲームの音でかすぎ！」

「あーもうるせえなあ、わかったって！」

2歳年下の弟、楓^{ふうが}雅はそう言いながらリモコンを手にする。

お母さんはパタパタとスリッパの音を立ててクッキーの乗った皿を机に置いた。

「美術部は終わるの早いね。」

「ああ、今は×切終わったばかりで、次の展覧会までは日があるから。」

「そつか。じゃあちゃんと勉強するのよ。また全国模試があるんでしよう。」

「あ、うん。わかってる。」

「小説家になりたいからって、パソコンばかりしないでよ。」

「わかってるって。」

お母さんはいつものようにおやつを作ると仕事に出かけてしまう。

その仕事に行ったあとがあたしの一番幸せな時間だった。

「よし、今日も小説書いちゃおう！」

あたしは自分の部屋にあるパソコンを開いた。

小学校のころから読書感想文でたくさんの賞を貰っていた。

あたしはその頃から文章が大好きでいくつもの小説を書いた。

お母さんは反対はしなかったけど、きつとどこか面白くないんだろう。

あたしが小説家になりたいから小説を応募したいと言ったときは「それはだめだ」と言った。

だからせめて…とあたしはブログで小説を書き始めた。

愛莉も見よう見まねで小説を書いている。

お母さんがいなくてずっと小説が書けるこの時間があたしは大好きだった。

「あ、今日もコメントが来てる！」

あたしの小説は主に推理小説だ。

難しいし、トリックを考えるのにも一苦労だが、その分楽しいものだった。

『え！？これどうなるの！？続きが早く読みたい！』

『このトリックはなかなか思いつかないですね！さすがです。』

『これもう、販売されてもいい出来じゃないですか？応募してみては？』

『に同感です！…！』

いくつものコメントを読んでいるだけで幸せだった。

そんな時だった。

あたしの眼はあるコメントにくぎ付けになった。

『貴方の小説はとても面白いですね。貴方はきっと素晴らしい人ですね。』

そんな何処か意味ありげなコメントはあたしの心を不思議な気分にした。

そのコメントの差出人は 見知らぬ人 だった。

「見知らぬ人」？そんな人、読者に居たっけ…？」

あたしは、読者一覧を開き確かめた。

100人以上いる読者の中にそんな人は見当たらなかった。

”見知らぬ人”のプロフィールを開くと、至って地味なページが開けた。

愛莉の小説も派手だし、あたしのだってそんなに地味じゃない。

そーゆーのを見てからこのページを見ると地味すぎてコメントしづらいものだ。

その人のブログ一覧を見ると『今日、ブログ始めました！』と書かれていた。

その題名の記事はしょっぱなから、自分の趣味について語っていた。

”見知らぬ人”の趣味はパソコンと音楽鑑賞。

好きなジャンルは「日本ロック」だった。

「何これ…陵とそっくり…」

あたしはその人と友達になってみたかった。

ふと、コメントをする のボタンをクリックして、無意識のうちに文章を綴っていた。

『コメントありがとうございます。日本ロックが本当に好きなんです。』

あたしはいつもの自分とは裏腹に丁寧な言葉遣いで、文章を打った。たった2行のコメントなのに、あたしの気持ちはいつもと違っていた。

その数分後返信が届いた。

『はい。大好きです！では、貴方の好きなジャンルは何ですか？』

『私はJ・POPが好きです。あの明るい感じが好きなんです。』

『へえ、女子らしいですね。』

あたしは初めて女子らしいと言ってくれた”見知らぬ人”のことを不審に思った。

この人はあたしがJ・POPが好きというだけでそう言った。

だけど、その不信感と同時に嬉しさが体中に広がった。

こんな男女を「女子らしい」と言ってくれるなんて、あたしには幸
せすぎる出来事だった。

まだ恋を知らなかった中学生のあたしに始めて咲いた小さな蕾。

その蕾の存在をあたしはまだ気づいていなかった。

続

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7693z/>

ネットの向こうのキミへ

2011年12月25日22時49分発行